

# 終わる世界の中空散歩

わわわわ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

めちやくちやになった地球を琴葉姉妹がラジオ放送しながら歩くだけのお話。けど、情景描写があまりにも難しかったので会話文のみ。

# 目次

終わる世界の中空散歩

—  
1



# 終わる世界の中空散歩

「火星の皆さん聞こえますか？こちらVOICEROID・タイプGemini・No2  
琴葉 葵です。おはようございます。こんにちわ。こんばんわ。いつてらっしやい。  
おかえりなさい。頑張ってください。お疲れ様でした。また明日。これを聞いている  
人たちが心安らかに過ごせますよう祈っています」

「葵、長いで」

「しっ、黙って。えっと、本日は緯度一一一軽度一一一旧アメリカのオレゴン州あたりか  
らお送りします」

「はよ行こやー」

「お姉ちゃん！ちゃんと挨拶して！」

「ええー、もーええやん。これで何回目の放送やと思ってるん？もう聞き飽きたやろ？  
なあみんな？……………まあ聞いても返事は返ってこんけどなー」

「お姉ちゃん……………」

「あー、わかったから。泣きそうな顔せんといてえな、そんな機能ないやろ？」

「泣いてない！」

「はいはい……………ほなうちはVOICEROID ・タイプGemini・Nol 琴葉茜や。今日も一日よろしゅうなー」

「では、今日も琴葉姉妹、行つてきます」

「……………」

「……………」

「挨拶終了」

「今日はどつちいくん？」

「決まってるないよ」

「やったらいつもどおり、せーので決めよか」

「「せーの」」

「西」「南」

「西南だね」

「西南かー海に近づくなあー」

「そうだね。けどまだまだ遠いよ？」

「せやなー。うちら最近避けとつたもんなー」

「まあ、あんなことがあつたもんね」

「二人一緒に食べられた話なー」

「あれはひどかったね」

「けどあれやん。あのでっかい魚のお腹ん中に、一つの生態系が出来てたんはびっくりしたな」

「ほんと、魚のお腹の中なんて、信じられないくらい綺麗だったよ」

「絶滅しとった生物もいっぱいおったしな」

「クジャク！クジャクが綺麗だった！」

「うちは珊瑚が好きやったな」

「お姉ちゃん、よく寝る前に写真見返してるもんね」

「それは葵もやん」

「あはは、いっしょだね」

「せやなっ」

「……………」

「……………」

「けど、それも結局火星に送られたしな」

「いいことじゃん。私達が見つけた資源が、火星の人達の生活に役立つてるんだよ？」

「その結果また地球さんが怒って地殻変動が起きたで？」

「それは…」

「まあ、稼働できてるし儲けもんやけどな」

「……………それより、こちら辺重力めちやくちやだね」

「せやなー。お陰で体が軽いわ」

「私未だに慣れないよ、浮いてる足場って」

「ほんま？アトラクシオンみたいで楽しいやん」

「どこが!?!浮いてる岩場を、重力がめちやくちやな状況で跳んで渡って行くアトラクシオンなんて、誰も見向きもしないよー」

「火星の人達もこつち来てやってみればハマるんちやう？」

「絶対無い！それにそもそも人間はここに来れないでしょ？こちら辺、酸素無いし」

「アルゴン77%！」

「残りは一酸化炭素と窒素だって」

「意味わからんわ」

「重力場がいくつもあるほうが意味不明だよ」

「ぴよいんぴよいん跳ねれるからええやん」

「よくない！重力場は目に見えないから、目に見えるもので判断しないとイケないのが

面倒」

「えー、ぱつと見でわかるやん」



「そんなのお姉ちゃんだけだよ」

「こつがあんねん。例えばあつちの方のあの岩」

「うん」

「あの岩の付近に重力場が二つあるから、重心の位置があそこにあんねんな。それで上の方に引つ張る力が強いから、こつち向かつて反つてんねん。あんだけわかりやすいと、岩の質量と重心の位置から、二方向の重力差が計算できるから、後は一番安定しるところに着地するだけやね」

「……………」

「他にはああいう水平になつて平たい岩は注意やな。宙に浮いとるんやから、一応重力の釣り合いは取れとる。やけどどんだけの太さで、どの方向に引つ張つとるんかわからんから、なるべく真ん中付近に着地する事。端っこ過ぎたら岩ごとひっくり返るで？」

「ごめん、何一つ伝わらない」

「そうか、それやつたらお姉ちゃんの後、ついてき」

「うん」

「こつから落ちたらどうなるんやろな？」

「あつちこつちの重量場に引つ張られて、くるくる回つた後、一番大きな力を持つてる岩

場に叩きつけられるよ」

「うそやん！なんでそんな事知つとるん？葵？」

「昔お姉ちゃんが好き心に釣られて落ちたからでしょ！」

「そんなん覚えてへんわ」

「どうして忘れられるの!?!確かにお姉ちゃん気絶してたけど、私達が起きた事を忘れるわけないでしょ!?!」

「ロボットやしな。多分データ漁つたらどつかにあると思うんやけど面倒やしなー」

「相変わらず適当だね」

「それがうちや」

「胸張らないで」

「エツヘン」

「ドヤ顔禁止」

「葵はかわええなー」

「誤魔化すのも禁止!まったく、その適当さで私がどれだけ苦労してると」

「けど葵かつて音声届けてへん時、結構適当やん」

「へっ?」

「この前やって資源あったのに、見向きもせえへんと逆さに登つてく滝見てはしゃいで

「たやん」

「ばっ?!ちよつとお!」

「そんで、はしやぎまくって滝に近づいたと思ったら河童に……」

「わー!!わあああー!!しゅ、終了!今日の放送!終了!!」

「あはは、やって?」

「も、もう充電もないしい!ご飯食べてスリープモードに入らないと!だから今日はこゝまで!!」

「しやあないなあ?みんな、堪忍な」

「お姉ちゃん!」

「はいはい、それじゃあ…さいなら」

「ま、また明日!」